



## PTA の存在意義

今週は、PTA 会費を提出いただきありがとうございます。会費回収の陰には、PTA 役員の方のご尽力があったことに改めて感謝します。

さて、令和5年4月にこども家庭庁の新設が決まり、「子どもの健やかな成長を見守る機能」としての家庭に焦点が当たることが増えています。しかし、日本の各家庭の構造は様々で、お子さんの実態や発達段階によっても家庭が抱える悩みや問題も変わっていきます。「わくわく通信33号」でも書いた通り、「子供は家庭で育ち、学校で学び、地域で成長する」のです。外部の様々な大人たちの支えがあってはじめて、子どもたちは豊かな時間を過ごし、少しずつ成長していけます。

戦後に文部省（当時）から発行されたパンフレットには、「子どもたちが正しく健やかに育って行くには、家庭と学校と社会とが、その教育の責任をわけあい、力を合わせて子どもたちの幸福のために努力していくことが大切である」と書かれています。パンフレットに書かれたこの文章こそが、「家庭」「学校」「社会」の三者が協働し合うために発足した PTA の理念です。

2019 年に中央教育審議会が、学校現場での長時間労働の問題が問いただされる中、解決策の一つとして家庭や地域との協働関係を見直すことが指摘されています。「問題の根底にあるのは、保護者や学校が教育を『サービス』だと考えていることにある」と教育研究者の鈴木大裕さんは言います。サービスの提供者と需要者の関係では、ともに子供のため協働していくという考えは生まれにくいのかもかもしれません。困難な諸事情を背負った子供たちを、居心地のよい学校にするにはどうすればいいかを考えることは、学校現場だけで考える問題ではなく、保護者を含めた地域全体、あるいは社会全体で考えていく必要があると思います。そういう意識を持つことで「自分の子供」ではなく、「自分の子供がいる学級」から「自分の子供がいる学校・地域」と視野が広がっていくのです。そして、「学校と家庭」や「家庭と家庭」の間を繋ぎ、地域に協働の輪をつくっていく役割を担い得るのが PTA だと思います。

平成 27 年度に厚生労働省により行われた「人口減少社会に関する意識調査」があります。調査により、7 割以上の家庭で子育てに伴う負担・不安を抱えていることがわかりました。しかし、各家庭の思いや情報を共有する場は少なく、聴く余裕もない学校現場が多いのが現状です。そういう中で「学校と家庭」や「家庭と家庭」の間を繋ぎ PTA という組織は、とても重要で意義深いものと考えています。繋がりが合っはじめて健全な本音のやり取りができ、「わくわく通信34号」で書いたように、学校のサポーターとしての立場で学校を応援していただければ、たいへんありがたいです。分断や対立を生み出すのではなく、健全な本音を語り合い、子供のための協働を生み出せる学校と家庭でありたいと思います。



PTA 会費を集計する役員の方